

II 文化住宅地区レポート

■ 1.

アジアの感じ。

京阪古川橋駅で電車を降りて幸福町という名の一面をぬけると、石原町、藤田町とつづく文化住宅の密集地区に入る。車の通る道を一本外れるとそこは、わずかな平屋の住居を除いては二階建、三階建の住宅しかない地域となる。予想とたがわず、一番目立つのは灰色の壁(もとの色は違ったのだろうか?)と青い屋根の二階建文化住宅である。文化住宅の基本的なスタイルとしては、外に階段と廊下が設けられ黒い鉄製の手すりのついたものが一般的であるようだ。建てられてもうずいぶん経つらしいことが、その暗い壁の色から分かる。こんな文化住宅が2・3棟並んでいるだけなら、大阪であればそう珍しくない。が、ここではかなり歩き回っても途切れることなく続いている。文化住宅以外で目につく建物は比較的新しいと思われる三階建住宅で、数軒がびっちりとは並ぶものが多いように思われた。壁は白いものや、タイル張りのもので主である。今挙げたような建築物でびしりと埋められた土地の隙間に、迷路の様に路地が走っていると考えてもらえばこの石原町、藤田町の様子がおよそ想像できるのではないだろうか。ところどころ文化住宅や長屋が向かい合うように建つ路地(道なのか?)が袋小路のようになっている場所がある。なんというか、生活感漂う眺めである。

歩きはじめてすぐに私は、自分がこの町でひどく居心地の悪さを感じていることに気づいた。私の存在が町から浮いている。近所の人から見れば私は‘よそ者です’と顔に書いて歩いているに等しいのではないだろうか?そんな考えが頭をもたげてくる。人をそんな気にさせる町である。もっと言えば、他人の家に勝手に上りこんでしまったような感じといえば近いかもしれない。路地から距離を置かない玄関口、さらに前に置かれた植木鉢や発砲スチロールのプランター、そしてあまりに飾らない商店。この町で当然とされている他人との距離感は、私の日頃の感覚とはちょっと違うのである。この空間でしか使えない物差しを持ってこの人たちは暮らしているように見える。そして、一歩外に出れば一般用物差しに切り替えているのだろう。それとも私の考え過ぎだろうか?

灰色の建物の間に、物干し台に掛かる洗濯物と植木鉢とが見える様子は台湾のどこかで見た光景と同じだった。路地を歩いていく時の居心地の悪さと、見られているような感覚は私に上海の街を思い出させる。さらに商店の、洗練からは程遠い様子もどこかにありそうである。こことよく似た空気を持つ場所は、きっとアジアの至るところにある。世界の東のはじっこで、人がやたらと集まろうとするときっとこんな感じになるのだろう。だから、私としては非日本的とも言いたくないように思う。ただ集まるためにやってきた、バラバラの人々によって形作られた町なのに、懐かしい感じがする。きっと自然がないだとか、環境がわるいだとかさんざん言いながら、いつのまにやらそれもまたよしと思えてくるこの感じ。いつかニュータウンにもこんな感情を感じるようになるのだろうか?

調査を終えて駅前の商店街に出たとき、やっぱり私はホッとした。折り曲げた地図を手に、ちょっとばかりきよきよろしていても、誰も気にしないと思えたからだ。

(山田理絵子)

■ 2.

京阪・古川橋駅でおりるとその前には普通のスーパーが立っていた。スーパーを裏に回るとまったく異なった景観が広がっていた。全体的に建物は小さくて古く、あまりきれいな所ではなかった。

まず道については狭く、無計画的に伸びていた。この幅では車が一台しか通るのが限度だった。道が狭いせいなのか車があまり走ってなく、自転車や普通に歩く人が多かった。

建物をみていると家のつくりは玄関が小さく奥に長かった。玄関に植木鉢をおいていたり、洗濯物が干してあるなどこまごまとしたものが目立つ家が多かった。また文化住宅が多く、これもまた同じような建物が多かった。これらの建物はほとんどが古いもので建て直しが進んでなく、全体的にひとつにまとまっていた。

次に商店街だがこれがまた多かった。アーケードがあるものやないもの、規模が大きいものや小さいもの、ほとんどの店が開いているところや、二、三割しかあいていないものなど様態はさまざまだったが、どのお店でも、店員と客が話をしながら買い物をしたり、商品に全然値札がついてなかったり、豆腐や、野菜、漬物などではバックせずに（また、分量にきらずに）売っていたりした。また土曜日の一番人通りが多くなるこの時間から店をあけるところがあるなど、スーパーで買い物をするのは違った企業の商業とはまったく異なった感じがあった。お店では食料品を扱ったもののほか、飲み屋、居酒屋、食堂、軽食ができるような店等が非常に多かった。

土曜の3時ごろだったからなのかさまざまな年齢階層の人通りが多かった。よく、人と人が道で出会って挨拶や言葉を話し合うような場面（主に中高年齢の女性）が多く見られ、それは集団的な感じがした。

(足立丈英)

■ 3.

- a : 道が入り組んでいて狭い事
- b : 街並に計画性が感じられない事
- c : 文化？ 住宅？

この3点を感じました。2000年11月14日、午前8時～10時。以下補足……。

- a : 第一に、車のすれ違いは勿論、やり過ぎすら不可能に近い道幅は、自動車教習所のS・クランクコースより厳しく、そのコースも酷く曲がりくねっており、おまけに見通しが最悪であったため、日本の街作りや建設の規格外に感じた。
- b : 上記に付随する問題だが、正直言って街に計画性が見当たらない。鳥瞰可能な視点に立てば、確実に目を回せそうな程入り組んでいる。その特性上、この街では乗用車よりも、原付や自転車の方が便利であると思われた。だが、日常はこれで問題無いとしても、非日常においては大問題と見えた。どう

やら調査の前日に火事があったらしく、三軒が完全に焼け落ちていた。防火に関してはもう少し気を遣うべきであろう。

c：これは先入観だが、文化住宅と言うからには、何らかの形で洗練された物を想像していたのだが、ごく普通の長屋で、その立地上火事が一層の脅威と思われた。

ただ、全てを見て感じた事は、色々な意味での「ここはどこ？」でした。

追記：後にこの演習で学んだ文化住宅の定義は、玄関、台所、風呂、トイレを備えた住宅である。所得倍増計画の途上にあった、日本政府の定義した文化的生活が初めて満たされた住宅だから、文化住宅と呼ばれ、現在に至る訳である。

(竹下善博)

■ 4.

自然環境と住居環境は密接な関係を持っている。日本の地震が多く、地盤が弱い自然環境は昔から日本の住居環境にも大きな影響を与えてきたと思われる。大阪の場合、岩盤層が地下深く位置しているため、高い建物を建てる場合は地下 20~30 メートルまで鉄のパイプを差し込まなければならないと言う。このような自然的な悪条件により、日本の建物は木造建築が発達されてきたと思われる。耐震性を考慮し、数多くの柱を立てると、部屋が狭くなるなどの現状になったのではないかと思うのである。近代に入ってから急激な都市化により人口の集中にしたがって住居難が生じ、その対策として門真市のような文化住宅密集地域が誕生したのではないか。ところで、このような文化住宅は決して快適な住まいであるとは言いがたいのである反面、今回訪ねた門真市では人々の間に人情のやり取りのようなものが存在しているような気がした。まるで、硬くて冷たいコンクリートと対比される木から感じられる感じのようだった。一方、都市への人口集中が日本より遅かった韓国の場合、人口集中にしたがって数多くのアパートが建てられた。一つの団地内に数百、数千世帯も暮らせる 15~20 階くらいのアパートが都市の至る所で目立っている。しかし、このような現代式アパートを、現代社会の人間味喪失の象徴、として捉える場合も多い。文化住宅に比べれば現代式のアパートの方が快適で便利かもしれないけれど、それによって、われわれが失った部分も忘れてはならないのではないのだろうか。

(金 尚奎)